

わが国におけるスポーツ観に関する研究 —スポーツの教育的価値との関係を中心に—

立木 宏樹

A Study of the Japanese Attitudes on Sport

—Focus on The relation to educational value of sports—

Hiroki TSUIKI

Abstract

The purpose of this study is to clarify the relationship between the formation of attitudes about sport and the educational value of sports in Japan today.

This study pays particular attention to the spread and development of sports through academic training to schools and organized sport clubs.

This change in organized school sports has brought with it a change in our attitudes about the educational value of sports. This change in school sports education has strengthened the positive attitudes towards sports in education, although at times this has had an adverse effect.

In a word our views about the value of sports has grown more complex, and our attitudes about sports in education are becoming more varied.

Key words : attitudes on Sport educational value of sports organized Sport Clubs in Schools

キーワード：スポーツ観 スポーツの教育的価値 学校運動部

2008.11.26受理

はじめに

近年スポーツの国際化が進み、わが国においてもグローバルスタンダードなる言葉において世界のスポーツと対比し、より世界的視野に基づいたスポーツのあり方が議論されるようになった。スポーツがより世界的へと普及・発展し、一定の方向性を追及する中で、わが国のスポーツ文化との異質性が浮き彫りになることが多くなってきた。柔道は、わが国における伝統的武術から武道へと普及・発展し、今日国際的競技としてオリンピック競技にも採用されている。現代における柔道のあり方を「柔道」を「JUDO」と表現として、世界のスポーツとわが国のスポーツの違いについてさまざまな議論を生み

出している。また、昨今の相撲界を揺るがす諸問題に対しても、国技としての相撲に対する外国人力士の摩擦問題として取り上げられる等、スポーツに対する考え方やスポーツのもつ意義、あるいはスポーツに取り組む態度に関して、わが国独特なものの存在を示唆している。このようなわが国のスポーツ文化と世界のスポーツ文化に生じる文化的差異は、わが国のスポーツの普及・発展が学校という教育の範疇に支えられてきたことに大きく影響している。つまり、現代におけるわが国のスポーツと世界のスポーツとの違いを創りだしてきたのは学校教育という場で行われるスポーツに起因するものであるということが考えられる。

研究の目的

本研究では、現代におけるわが国のスポーツ観の形成について、特に、わが国のスポーツが学校教育の範疇で普及・発展してきたことから、スポーツの教育的価値に注目するとともに、両者の関係性について考察することを目的とする。

関連用語の整理

スポーツ観については、大橋らは、スポーツの意義、目的などについての考え方として、スポーツ文化の構成要素のひとつと捉えている(大橋1982:19)。三本松は、スポーツ文化をスポーツ行動と峻別した上で、スポーツ観がスポーツ文化の構成要素として、社会における人間とスポーツをめぐる観念とし、社会におけるスポーツの正当化、価値づけを主張するもの。そして、具体的な内容としてスポーツ・イデオロギーや各種スポーツ論、スポーツ思想等を持っているとしている(三本松1988:25-26)。さらに、スポーツ行動に意義と方向性を与えるものとして、他の文化要素とともにスポーツ行動の指針として機能していると同時に、他の構成要素に意味と価値を付与しているとして、スポーツ観について、スポーツ行動を規定する大きな要因のひとつであることを明らかにしている(三本松1988:30)。一方、わが国のスポーツ観に関する研究については、その独自性という視点から多くの研究がみられる。岸野は、日本人のスポーツ観の特徴として、勝敗主義、自虐主義、修養主義、娯楽性の欠如、排他主義、自己喪失の6つを上げている(岸野1968:20)。上杉は、道・修行の思想に基づいて、苦しみのスポーツ価値意識として、精神主義、自虐主義、修養主義、全力主義の4つをあげている(上杉1977:40-43)。また、川辺は、日本人のスポーツ観を8つの構造モデル(健康・体力、楽しさ、ストレス解消、勝利主義、根性、集団主義、権威主義、心身一元論)を分類し、これらのスポーツ観が日本の社会の価値体系に影響されていること、さらには、そうした社会の価値体系の変化によるスポーツ観の多様化の可能性を示唆している(川辺1981:164-165)。以上、先行研究においてわが国におけるスポーツ観の形成とスポーツ文化との関係性について明らかにされていることが理解できる。

スポーツの教育的価値

現代におけるスポーツの多くは、スポーツが有する何らかの外在的価値によってその隆盛を維持している。スポーツの成功によって得られる報酬や名誉等、あるいはスポーツを行うことで得られる心身の健康や人間性の獲得等、多くの人々はスポーツを目的的活動としてよりも手段的活動として実践しているのである。わが国においても、スポーツは近代における教育(体育)として普及・発展してきたことで、スポーツにおける教育的価値が強く求められてきた。世界的な近代スポーツの普及・発展においても、スポーツにおける教育的価値は最も重要なものとして位置づけられ、多くの人々にその考えは受け入れられてきた。スポーツにおける教育的価値はイギリスにおける近代スポーツに端を発する思想(スポーツ・アスレティシズム)として、スポーツの外在的価値のひとつとされてきた。スポーツ・アスレティシズムの思想は、イギリスのパブリックスクールにおける教育の一環として、スポーツ(フットボールを中心として)を用いたことからその広がりを見せることになったことはすでにその歴史的研究から明らかにされている。特に、中世のイギリスにおいて、野蛮で暴力的なスポーツを知的で安全なものへと変化させ、スポーツの文化・社会的価値を獲得するうえで、スポーツの教育的価値は大きな役割を果たすこととなった。また、近代オリンピックを構想したクーベルタンはスポーツの教育的、社会的意義を強調し、近代オリンピックを現代における世界のスポーツイベントへと拡大する契機を与えた。わが国は、こうして創りあげられた近代スポーツを明治期に外国から輸入することとなった。その多くが教育機関で普及・発展したことが、わが国におけるスポーツの教育的価値への傾斜を強めることとなったひとつの要因として考えられる。しかしながら、教育機関でのスポーツの普及・発展がわが国スポーツ文化の独自性ではない。学校教育という範疇が問題なのではなく、学校教育におけるスポーツのあり方が、わが国のスポーツに大きく影響するのである。つまり、学校教育を超えて、社会、文化、風土等といったものにスポーツは大きく影響されており、学校教育はそれらを強化する装置としてその役割を担っているに過ぎないのである。

スポーツ観と教育的価値

スポーツの教育的価値はその国々の社会、文化、風土等と関係しながら、スポーツ文化を創りあげている。先

行研究でも明らかにされているわが国におけるスポーツ観の多くは、そのままわが国におけるスポーツ文化の独自性を創り出す要素として挙げられている。そして、こうしたスポーツ観とスポーツの教育的価値とは密接に関係しつつ、両者は相互に強化する結果となっているのである。日本の風土や日本人論さらには禅といった宗教等に影響されるスポーツ観は、そのまま人間論として、日本人のあるべき姿(その時代における期待された人間像)として受け入れられ、スポーツによる人間形成を主眼としたスポーツの教育的価値へと結びついていたのである。さらには、こうしたスポーツの教育的価値における人間形成が強調されればされるほど、日本の風土や日本人論、宗教的領域あるいは日本社会のイデオロギーを根底に持ったスポーツ観が強化されていったのである。

わが国におけるスポーツの多くは明治期に輸入されたものであり、大学や師範学校、高等学校などの教育機関が主たる受け皿となった。そこでは当然教育としてのスポーツが実践されることとなった。そこで求められたもののひとつは、明治期以前にわが国の精神文化を支配していたといえる武士道である。本来スポーツは身体文化として身体の領域に深く関わるものである。しかしながら、わが国においては、身体よりも精神に注目し、精神が身体を支配し、時には、身体的能力以上の力やパフォーマンスが精神によって発揮できるとし、武士道の注入による精神性にその注目が向けられることとなったのである。ここから、精神主義や修養主義、自虐主義、娯楽性の欠如といったスポーツ観は道(みち)のもつ精神文化によってすばらしい人間性を創りだし、身体をも支配する強固な精神を育むものとしてスポーツの教育的価値に組み込まれていったのである。

こうした精神性とともな、わが国のスポーツ観の象徴的なものとして集団性が挙げられる。この集団性は、さまざまな日本人論や風土論あるいは日本の社会的特徴(村社会や家父長制)等と深く関係している(「和」、「連帯感」、「甘え」、「イエ」、「ムラ」、「間柄」等、日本人の集団性をさまざまなものと関連づけてその特徴が説明されている)。スポーツ観においてこうした集団性は、集団主義、個の埋没や自己喪失等と表現され、スポーツの教育的価値の中心として位置づけられてきた。チームスポーツは集団性を養うために有効である。そのなかで、チームの成績が個人の欲求や楽しみよりも優先され、チームとしての連帯感が求められたのである。明治期から二度の世界大戦をへて、高度経済成長を実現する中でも、日本全体の美德として語られて来たといっても過言ではない。集団性や個の埋没、自己喪失といったス

ポーツ観は教育において、集団の利益の優先や自分を犠牲にして他人を助けるといったスポーツを通じて養えるスポーツの教育的価値として多くの人々に浸透していったのである。

高校野球にみられるスポーツ観

スポーツ観と教育的価値の関係性は、国民的スポーツイベントのひとつである高校野球において顕著にみられる。わが国におけるスポーツ観の形成の場として機能してきたもののひとつに高校野球の存在があげられる。明治期に輸入された野球は、さまざまな歴史の変遷を経て、メジャースポーツのひとつとして成長を遂げてきた。一高野球に代表される武士道との結びつきが「野球道」なる言葉で語られ、「一高式練習」なる猛烈な練習による修練主義や鍛錬主義や応援団を巻き込んだ集団への帰属意識等のスポーツ観は、その後、学生野球における「野球害毒論」と「野球擁護論」の論争などをへて、スポーツの教育的価値によってより強く追求されるものへと創りあげられていたのである。また、「野球害毒論」と「野球擁護論」の論争や職業野球の普及・発展等の歴史社会的背景は野球への国民的関心を広めるとともに、甲子園大会なる現代における高校野球のシンボリック的存在である大会の開催へと導くこととなった。春、夏における一大スポーツイベントとしての高校野球はまさにわが国における国民的行事であるとともにスポーツ(野球)と教育を強く結びつけ、スポーツの教育的価値のシンボリック的存在であるといっても良い。ここでは、日々鍛錬し、母校あるいは郷土のために全力で戦う高校球児の姿が求められ、修練の結果として、何連投もする投手の活躍が賞賛される。そして、こうした高校球児の姿をスポーツにおける教育の一環として人間形成といった言葉で、よりそうしたスポーツ観の正当性を主張しつつ、さらに強化していくのである。また、個人の業績あるいは失敗はチーム全体の業績であり失敗である(こうした考え方が松井の連続敬遠を生み出した)。さらには、個人の不幸事によるチームの連帯責任(昨今では一個人の不幸事とチームの出場停止との問題を生み出している)となるといった集団主義的イデオロギーをスポーツの教育的価値として認めさせいったのである。しかしながら、高校野球における不幸事問題への対応は昭和40年代から50年代を境に若干変化している。教育的価値としての集団(チーム)による連帯責任から教育的配慮としての個人的責任へとその視線は変化し、修練主義や鍛錬主義といった精神性は、スポーツ科学に基づいた合理的トレーニング

やメンタルあるいはモチベーションといったものへとその様相は変わりつつある。こうした中で、高校野球時の不祥事問題や特待生問題や金銭授与問題等の高校野球連盟の対応や教育現場での反応は明らかに、従来のスポーツ観とそれを強化するべくスポーツの教育的価値のあり方が変化していることが伺える。

柔道にみられるスポーツ観

高校野球と同じようにスポーツ観とスポーツの教育的価値との関係性が強く求められ、さらにはわが国におけるスポーツの独自性に大きく影響していると考えられるものとして武道が挙げられる。ここでは特に現代においてその点で注目されるべく柔道に注目して述べていきたい。柔術が柔道へと変更されたこと、あるいはその柔道が学校教育に採用されたことなどからみても、スポーツ観とスポーツの教育的価値との結びつきは強いことが理解できる。そもそも柔術は人殺しの技としてさまざまな格闘技のひとつとして位置づけられていた。人殺しを生業とする武士の衰退は、柔術の衰退へとつながり、柔術の再考が求められる。そこで、武士道としての精神性を残しつつその新たな姿が創りあげられることとなった。これがいわゆる武術から武道、つまり柔術から柔道への始まりであった。道の精神性に強く影響される柔道は、精神主義や修養主義さらには師弟関係における礼節やその振る舞いに至るものまでもスポーツ観として創りあげられていった。また、「中押し」といった考え方や勝ち方負け方の美学なるいわば勝敗観といったものまでの独自性をもったスポーツ観として創りあげられていった。こうしたスポーツ観の多くは、わが国の伝統を持つ武道教育によるスポーツの教育的価値としてより強化されていったのである（柔道がスポーツであるという位置づけに異議を唱えるものもいるであろうが、わが国におけるスポーツ観を考えるうえで柔道は最も大きな影響を与えたひとつであり、教育的価値の追求においてわが国のスポーツ観が幅広くなおかつ深く浸透していったことは明らかであるため、ここではスポーツと区別することはしない）。そして、さらに高校野球の際に述べているように、「野球道」として「道」の根源となる「武士道」の影響を強く受けるものとして、その武道におけるスポーツ観はさまざまなスポーツにおいて共通の観念となり、わが国におけるスポーツ観の根幹を成すものとして位置づけられた。このようなスポーツ観は、わが国の伝統的スポーツとしての武道における教育的価値の追求と同時に、より強調され、武道におけるスポーツ観からわが国スポ

ーツにおけるスポーツ観へと強化されていったのである。近年の柔道界に目を移してみると、「柔道」と「JUDO」の違いとして、ルール(ポイント制やサドンデス制の導入等)や用具(カラー柔道着の採用)、施設(畳の色の変化)の変化にとどまらず、そのスポーツ観にまでもその変化が見受けられるようになってきた。一本とポイントによる勝負観の変化や礼節、その振る舞い(試合後のガッツポーズなどの喜びの表現や日常生活におけるあるべき柔道家の姿)などについてもそのありように変化がみられるようになって来た。わが国におけるスポーツ観の多くは風土論や日本人論等、伝統的なわが国の社会、文化的事象と強く関連づけられると同時に、各時代における社会的背景やその価値体系の影響を受けている。また、スポーツの教育的価値に関してもスポーツ観に作用するといった点では、社会の価値体系に基づいた善悪によって、その強化ばかりではなく、ときには否定的な働きかけをすることとなる。このような視点に基づいて考えるならば上述するようなスポーツ観やスポーツの教育的価値の変化は現代社会における社会あるいは社会的価値体系の変化として読み取ることができるであろう。また、こうした社会の変化は価値観の多様化を生み出し、さまざまな価値観が同居する社会となっている。スポーツにおいても、一種のステレオタイプとしてのスポーツ観やスポーツの教育的価値を求めることは困難になってきたということとなる。ある人は楽しむためにスポーツを行い、ある人は健康のためにスポーツを行い、ある人は限界への挑戦を求める。こうした中で、従来述べられてきたスポーツ観とスポーツの教育的価値の関係は新たな局面を迎えていると考えられるのである。

わが国におけるスポーツ構造の揺らぎ

歴史的にわが国における代表的なスポーツとしての高校野球と柔道についてみてきたが、その変貌は明らかである。こうした変貌の要因のひとつに考えられるのが、スポーツ観を形成し、スポーツの教育的価値を謳い、スポーツ観を強化する、あるいは新たなスポーツ観を創出する場として学校教育の場においても特にその機能を担ってきた存在として学校運動部の変化が挙げられる。

わが国におけるスポーツ文化の中心的存在としての学校運動部も近年その状況が大きく変化している。少子化に伴う生徒数の減少や顧問教師の不足、あるいは地域におけるスポーツクラブの台頭等によって、運動部あるいは運動部に加入する生徒が減少しているのである。(財)全国高等学校体育連盟の調査によると、平成15年度の

加盟登録者数は1,258,684名であったの対して、平成19年度の調査では1,201,886名と4年間で約5万7千名の減少となっている。競技によっては加盟者数が増加している競技もみられるが、今後加盟者数が増加する見込みはなく、学校運動部が大きな変革期を迎えていることは事実である。学習指導要領により明確に位置づけられていない部活動に、教育現場におけるさまざまな諸問題を抱え、ますます多忙を極める教師が指導者として十分に指導に関わることは困難となり結果的に部活動衰退の要因となっている。(外部指導者の導入で対応してはいるもののスポーツ観やそれらに影響を与えるスポーツの教育的価値を強く求められるものとはなりえていない)。また、地域のスポーツクラブの台頭は、ただでさえ少子化で部員の獲得が難しい運動部をさらに衰退させるものとなっている。多くの地域におけるスポーツクラブは専門の指導者を有し、体系的にスポーツ技術の指導を受けることが可能であり、中には専用グラウンドや移動バス等、充実した環境を有するクラブも少なくない。プロサッカーのJリーグでは下部組織が充実し、トップアスリート生産のルートのひとつとして確立している。そこでは、プロ指導者による一環指導の下、プロ選手に遜色ない環境でサッカーをすることができる。また、昨今の若い日本人の国際的な活躍の多くは、こうした地域のスポーツクラブや私的(家族による)育成、さらには海外でのプレーの選択にまで及んでいるのである。オリンピックで活躍する水泳選手の多くは、民間スポーツ施設によるスポーツクラブ出身であり、ゴルフで世界的な活躍をする若手ゴルファーの多くは、父からの指導で世界に羽ばたき、若干14歳にして渡米し、現在プロテニス選手として、数々の世界大会で活躍するテニスプレイヤー等、すでにスポーツの多様化は、学校運動部のみの問題をはるかに凌駕するものとなっていると考えられる。こうしたスポーツ環境の変化の背景には、現代におけるスポーツのグローバル化による国際的スタンダードの流入が挙げられる。そして永くわが国のスポーツを支えてきた学校運動部は、その変革が余儀なくされ、わが国におけるスポーツ構造全体が揺らぐとともに、そこで創りあげられ強化されてきたスポーツ観とスポーツの教育的価値のあり方についても、その変化を求められている結果となっている。

まとめ

わが国におけるスポーツ観はその独自性をもって現代スポーツ文化を構成してきた。そして、そのスポーツ観は学校教育、特に学校運動部においてスポーツの教育的価値と強く結びつき、わが国のスポーツを支配する観念として位置づけられてきた。国民的スポーツとしての高校野球や柔道は日本古来の風土や日本人論、さらには日本社会論等、旧来から日本人が持ちえるものとスポーツを結びつけることで特徴的なスポーツ観を形成する装置として機能すると同時に、スポーツの教育的価値という思想においてそれらのスポーツ観をさらに強化する役割を担ってきたといえる。こうした関係性によって日本のステレオタイプとしてのスポーツ観が現代まで叫ばれてきたのである。つまりわが国におけるスポーツ観はスポーツの教育的価値として広く人々に浸透することでより強固なスポーツ観として創りあげられたものであるということが言える。そしてそれは、学校教育、学校運動部の隆盛によって支えられてきたのである。しかしながら、こうした機能を有したスポーツ観とスポーツの教育的価値の関係性も、スポーツにおける国際的スタンダードの大衆化やそれに伴うスポーツ環境の変化などによって、学校教育、学校運動部の変革に伴い変化している。現代における社会と社会における価値体系の多様化によって、スポーツ観も多様化し、それらのスポーツ観の強化に一定の方向性で影響を与えてきたスポーツの教育的価値も時には逆作用する可能性をもつようになった。つまり、スポーツ観とスポーツの教育的価値についてもより複雑で、多様な関係性へと変化しているということが言える。

引用・参考文献

1. 体育・スポーツ社会学研究会編(1982)『体育・スポーツ社会学研究1』19-38
2. 森川貞夫 佐伯聰夫編(1988)『スポーツ社会学講義』大修館書店
3. 体育・スポーツ社会学研究会編(1982)『体育・スポーツ社会学研究1』道和書院39-58
4. 体育社会学研究会編(1981)『一流競技者の社会学』道和書院 149-168
5. 財団法人高等学校体育連盟 (2007)「平成19年度加盟登録状況」
http://www.zen-koutairen.com/f_regist.html
5. 中村敏雄(1981)『スポーツの風土』大修館書店
6. 中村敏雄編(1998)『日本文化の独自性』創文企画
7. 中村敏雄編(2002)『日本人とスポーツの相性』創文企画
8. 有賀郁敏 池田恵子 小石原美保ほか(2002)『スポーツ』ミネルヴァ書房
9. EricDunning(2004)SPORTMATTERS Sociological studies of sport, violence and civilization(=大平章訳『問題としてのスポーツ サッカー・暴力・文明化』法政大学出版
10. 佐伯年詩雄 (2006)『現代スポーツを読む』世界思想社
11. 大谷善博監修 三本松正敏 西村秀樹編 (2008)『変わりゆく日本のスポーツ』世界思想社